

Part

3

Benefit & Risk

1st
Special
Feature

Don't Feel... Think!

終盤の取り切り力が
勝敗を決する

Takehumi Watanabe
渡辺剛史が導き出す

頻出パターンの解!

ナインボールやテンボールであれば、最後の球をポケットするまで勝敗は決まらない。取り切りまで残り2~3球、ここでミスしてしまえば、勝利を手放し、これまでの苦労は水泡に帰してしまう。そうならないためにも残り2~3球の頻出する配置と取り切りパターンは自分の中でしっかり押さえておかなければならない。このパートでは、渡辺剛史プロに配置を交えて有効な手段を伺った。

取材協力/バグース道玄坂(東京・渋谷)

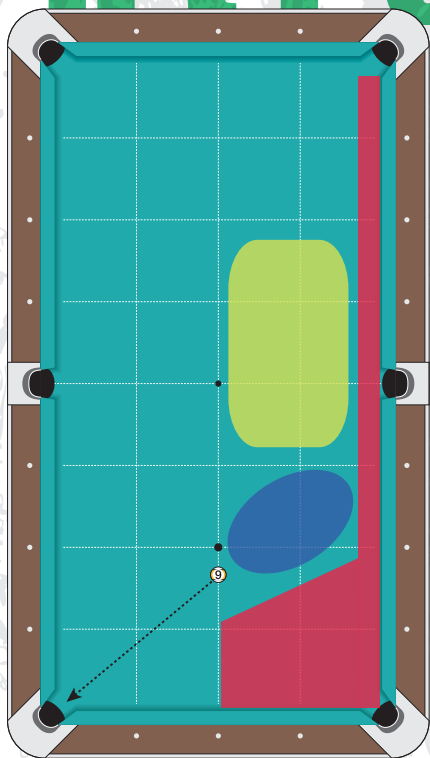
Intro

ベスト・ワーストの考え方

JPBAの渡辺剛史です。配置をご紹介します前に私が思う「最後の球へのポジションの考え方」をご紹介します。

取り切りは、「ラストボール（ナインボールであれば⑨）をいかにシュートしやすい位置にポジションするか」を考え、そこから逆算して組み立てていくことが肝心です。例えば、1球前の配置にもよりますが図のようにテーブル右側に手球をポジションして左下コーナーにポケットすると決めた場合、ベストな位置（青色ゾーン）、ワーストの位置（赤色ゾーン）、ベターな位置（黄色ゾーン）を把握しておく必要があります（図のエリアはおおよそです）。図を見てみると、ベストな位置の近くには土手撞きやサイドポケットを狙わなければならないワーストのゾーンがあることがわかります。つまり、ベストポジションを狙えば、短く（長く）なってしまうと常に悪くなってしまいうリスクと隣り合わせの状態です。ナインボールやテンボールは最後の球をシュートして初めて点になるもの。最後の球でこのようなリスクを負うことは得策とは言えません。ここで狙うべきは、ベストではないがポジションミスの少ない黄色ゾーンです。このゾーンを狙い、短く（長く）なってしまうでもベストゾーンに行くようなポジションの仕方が理想と言えます。自分のシュート力と相談しながら、この「色分け」をして最もリスクの少ない選択肢を導き出すことが重要です。

では、この前提を踏まえた上で、次項以降の頻出配置の取り切りパターンを検証していきましょう。

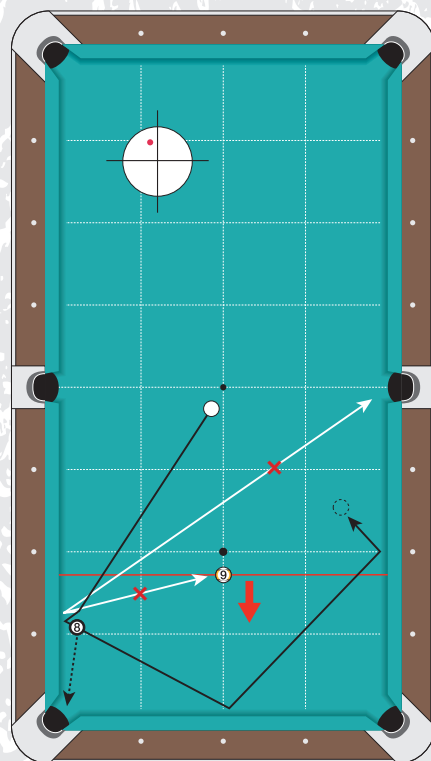


青＝ベスト
赤＝ワースト
黄＝ベター

ナインボール2球取り切り

まずは2球取り切りの頻出パターンを押さえましょう。この配置はナインボールの場合、ラック4列目に⑨をセットした時になりやすいオーソドックスな配置です。このパターンのポイントは、⑧が⑨と長クッションを結んだラインの上にあるか下にあるかです。これはブレイクの加減やテーブルコンディションによって左右されます。

ラインより⑧が下にある場合、この時は引きやヒネリで長一長の2クッションを選択すると切り返しを選択する人がいるでしょう。⑧が⑨より下にある場合、この時は切り返しの一択です。なぜなら、引きやヒネリを選択した場合、回転が甘ければ⑨に当たってしまったら、回転が掛かりすぎた場合スクラッチコースに乗る危険性ははらんでいるからです。切り返しは基本的にシュート率が下がる方が多いかと思いますが、この配置の場合⑧がポケットに近い場合、シュートリスクを少し上げてもポジションリスクを下げる選択をした方が良いでしょう。



Takehumi Watanabe

渡辺剛史(わたなべ・たけふみ)

1982年12月17日生まれ JPBA43期生

『(株) BAGUS』(バグース)インストラクターとして丁寧でわかりやすいレッスンが好評を集めている。また、JPBA関東支部の理事としてピリヤードの普及促進にも尽力している。バグース主催で行われた世界記録挑戦イベントでは、バグース所属プロとして西尾祐プロ、赤狩山幸男プロ、塙圭介プロ、東條紘典プロとともに、特別ゲストにお笑い芸人・じんいちダビッドソンを招いて記録に挑戦し、世界記録を達成。

「休業期間も明け、ようやくレッスンを受けて下さる方も戻ってきました。自粛中は筋トレ、ランニング、読書等はずらライフワークとして継続的に、この期間中は特にたくさん本を読みました。語彙力が上がるとイメージが言葉となって鮮明になり、再現性が高まる気がします。試合がない状況が続いていますが、自分の中で目標を持って過ごしていたので、変わらずモチベーションを保つことができていました」

profile





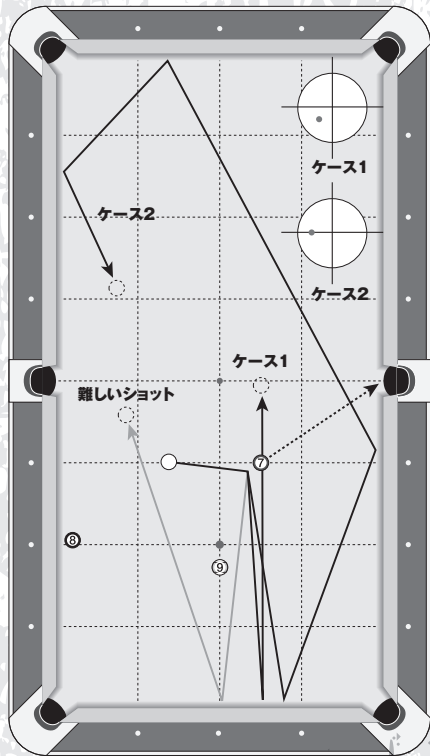
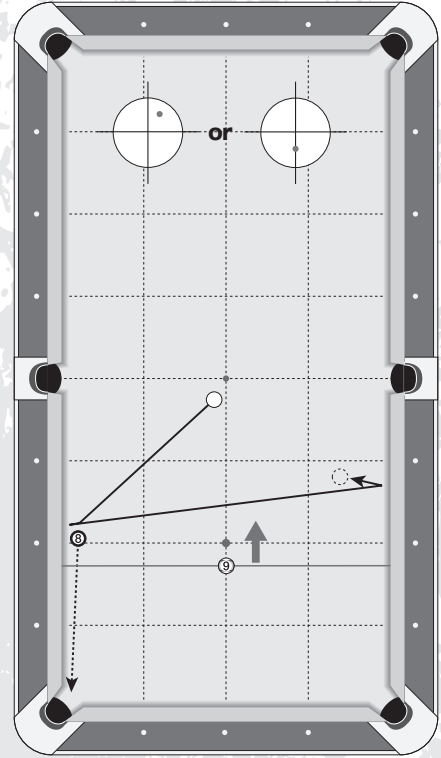
ナインボール2球取り切り(2)

⑧が⑨より上にある場合、細かく分けるといろんな種類がありますが、「押しとヒネリ」か「中心付近の下」のバタバタ2クッションでポジションするパターンがあるかと思えます。「押しとヒネリ」を選択すれば、見越し(厚みに対する誤差が生じる)のリスクがありますが、スロウが起きにくく、ゆっくり撞くのでポケットの受けが広いという恩恵を受けることができます。

「中心付近の下」の撞点を選択すると、スロウが少しだけ起きるリスク、中心付近のシビアな撞点で難易度が若干上がりますが、見越しが少ない分シュートしやすい恩恵を受けることができます。

このバタバタでポジションする場合、右側にポジションして左下コーナーに入れるか左側にポジションして右下コーナーに入れるかの2通りありますが、その時は「利き手」を優先させましょう。例えば右利きの人が左側にポジションした場合、構えが不安定・エクステンションを必要とする配置があるため、できるだけこのリスクは避けましょう。

Aの配置のような切り返しの選択はやめましょう。逆ヒネリ(左)を撞くリスク、ポケットから2ポイント近く離れた位置からのシュート率Downを鑑みるとリスクの方がはるかに大きい選択です。



ナインボール3球取り切り

ではここからA、Bのように出すための⑦の取り方について見ていきましょう。この配置で左下コーナーに⑧を入れるためのポジションをするには、手球が行きも帰りも⑨に干渉してしまう可能性がある難しい配置です。この場合、⑧・⑨の間を通して⑧に対して厚く出すことは諦めます。

まずケース1、押しが入ると右下コーナーポケットへのスクラッチコースに乗るので厳禁、引きを入れてもらいヒネリが噛んでしまうので、ここは「引きと左」を入れてもらいヒネリを相殺させます。すると、真っ直ぐ下短クッションに向かい、真っ直ぐ返せるようにポジションすることができます。この選択は、⑦シュート率Up、⑧シュート率Downとなります。

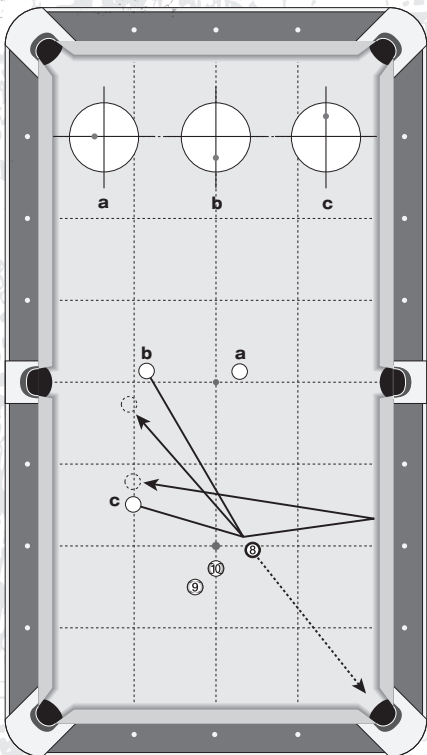
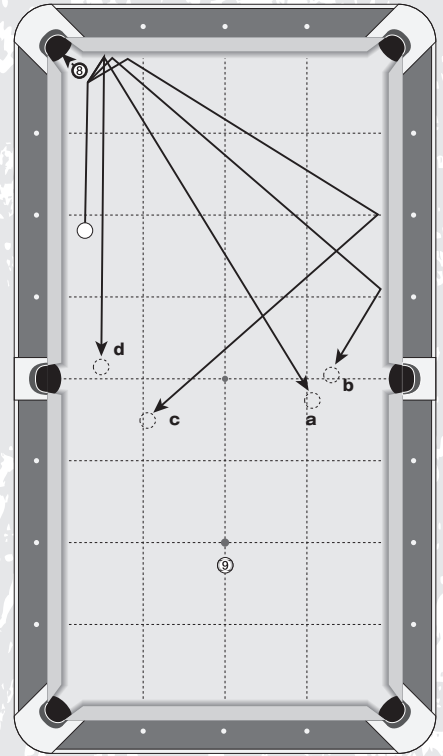
それでも厚く出したいという方はケース2。左ヒネリ4クッションで回す方法があります。この方法はヒネリもキュースピードも必要になるショットですので、⑦シュート率Down、⑧シュート率Upという効果が得られます。この2つのケースは両方押さえたいですね。よく見かけるパターンでNGな選択を紹介すると、⑧と⑨の間を通して⑧に対して厚く出そうとする、これは⑧にも⑨にも当たる可能性がある上にスクラッチもあるため、リスクの方がはるかに高いです。また、押しの3クッション『箱球』で出す方法。これは台のコンディションによって押しのカーブが膨らむリスクがあり、1クッション目が長く入ってしまった時に手球を⑨に当ててしまう不安定な選択です。どちらも出なくはないですが、危険のある選択です。ここではスクラッチラインに干渉しないことを第1条件として考えた方が良いでしょう。

もし、⑦がサイドポケットに近い位置にあれば、『箱球』が有効です。

穴前のポジション

穴前の球を入れてポジションするのは、非常に難しいです。厚みの自由度が高く、そこから動く手球の自由度も同様に高くなるからです。

図の場合、1クッションで左右(a、d)、2クッションでも左右どちらに出すことも可能です(b、c)。ここで前頁の『Intro』の考え方が生きてきます。「黄色ゾーンを狙って長くなっても青色ゾーンに行く」こと最優先に考え、「体勢が不安定になるリスク」を排除し、僕なら2回クッションに入れて止まる位置がより安定するbのパターンを選びます。穴前のため、「厚み」「ヒネリ」「キュースピード」いろんな組み合わせでこの方法は取れますので、自分がより安定するものをいくつか体得しておきましょう。センターラインに届く力加減を覚えておくと取り切り率が上がります。



テンボール3球取り切り

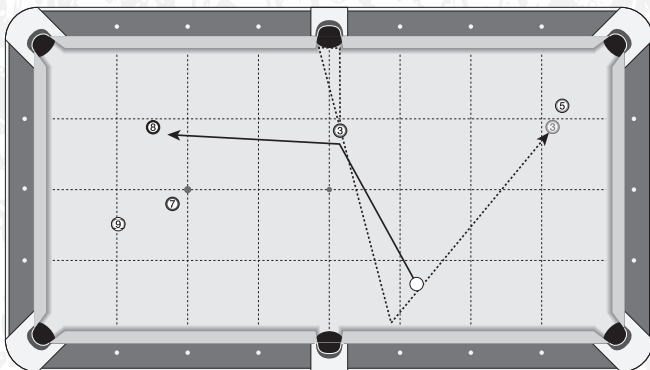
テンボールでよくある配置は、図のように「片方のポケットが塞がっている」ような近付いた配置です。3列目ラックセンターの⑩を⑧・⑨で挟んで並べた場合、ブレイクスピードに自信がない方はなりやすい配置です。スピードで言えば30km以下のブレイクです。33~4km以上からこのようなトラブルは起きにくくなります。この配置を避けようと⑧・⑨以外の球を⑩に近付けてラックを組むと、序盤でこの局面と向き合うことになります。ラック2列目に⑧・⑨をセットした場合は図の上の方に行くことが多いので、終盤は比較的自由度の高い配置になります。

ここでは3つの手球位置パターンで検証していきます。最も不確実性が高いのは、⑨・⑩に当たる右フリの手球aですね。こうなってしまった場合は手球のキスは避けられないので、どう当たってどう動くかを読んで撞くしかありません。当たり次第で良い配置になることもあります。避けたいショットですね。こういった密集した配置は、1球前の⑦が最も重要になることを念頭に置いておきましょう。

真っ直ぐの場合(b)、撞点下で撞いて⑨に対して薄く出す方法がありますが、その後が難しくなります。

確実性が高いのは左フリの手球c。cだと押し1クッションで出すことができます。ただ、厚みが薄くなりすぎると、ショットスピードを抑えたり、逆をヒネったりしないといけないので、シュート率が下がります。

渡辺剛史プロ 思い出の1SHOT!!



2013年12月14日 第1回フレクシカップ vs 土方隼斗
ナインボール、交互ブレイク、9ラック先取 1-1で迎えた第3ラック

ブレイク3球インで①のショット後、③から⑤へのポジション。スーパーショットではなく、愕然と差を感じてしまったミスショットです。『フレクシカップ』は、横浜みなとみらい『クイーンズスクエア』の特設会場で開催された大会で、通行人も観ているような状況でお客さんがすごく多くて、こんなに人に観られて撞くのはこの時が初めての経験でした。足が震えるほどめっちゃ緊張していました(笑)。

今思うと無理をするような配置じゃなかったんですが、何故かキューを立てて⑦と⑧の間を通して回そうとして、それがどそっぽに外れて……。ここはリスクを背負うような場面でもないし、立てキューを選択したことも間違っていました。会場の空気にプレッシャーを感じて正常な判断ができていなかったんですね。でも土方プロは何も変わらずいつも通り撞くんですよ(笑)。素直に「スゴイな」って思いました。

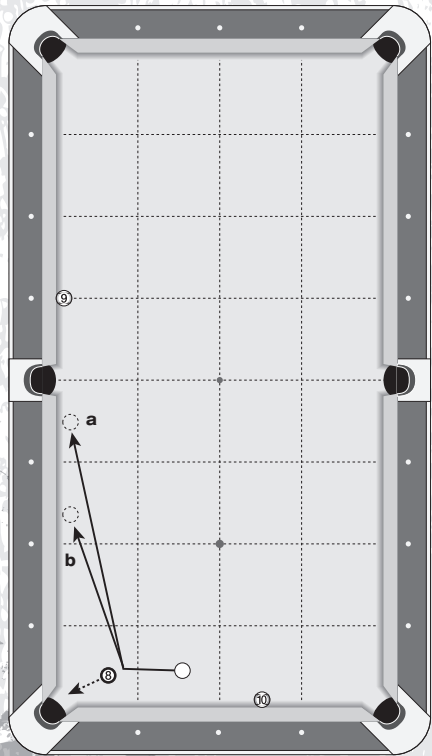
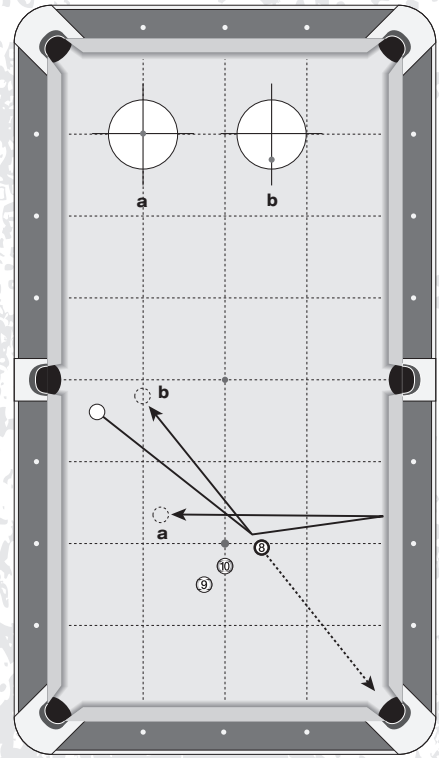
ただこの1球が自分のプレースタイルを築きかけとなってくれたんだと思います。

テンボール3球取り切り(2)

Eと同じ配置で手球位置が違うc側に厚く出たケースの検証です。この配置は自分の得意なショットとの兼ね合いになる配置と言えます。まずはスタン気味に真ん中付近をしっかり撞いて1クッションで出す方法(a)。これは⑨に対して良い位置にポジションできる可能性があります、途中でショートして⑩に進路を塞がれてしまう危険性があります。次に引きだけで⑨に対して薄く取する方法(b)。この方法は、aのような最悪のケースは避けることができますが、⑨が薄くなるので手球が走る分⑩に対してシュートもポジションも難しくなる危険性があります。

aは撞点を真ん中付近で安定して撞くことができますが、キュースピードが速くて手球の走りをコントロールするのが困難。bは端の撞点を撞かなければならぬシュートの不安定さがあり、引き加減のコントロールが難しいですが、キュースピードを抑えてシュートが安定する恩恵を受けることができます。

ポジション面とショット面で見て、ともに良い点と悪い点が挙げられる、好みの分かれる選択です。



ポジションに90%の力を注げる練習を

最後にポジション力を身に付ける練習法を。⑧のようにポケットに近い球をシュートすることは物理的難易度が低いです。この配置を⑨に真っ直ぐ出して引き球で⑩にポジションすると仮定した場合、⑨へのポジションによって⑩の難易度が大きく変わります。こういう時こそポジションに90%の力を注いで下さい。bのように手球が⑨に対して1ポイントでも遠くなってしまえばそれだけで引き球の難易度は跳ね上がります。「遠くなくてもいっぱい引いてポジションする」と考えてはいつまでも取り切り力が向上しません。近付きすぎて失敗するくらいの気持ちでaの位置まで近付ける練習をしてみてください。

この物理的難易度が低く、ポジションだけに注力できるエリアを広げることがビリヤードの上達に繋がります。

In conclusion まとめ

いろんな配置で検証を行ってきましたが、ビリヤードにはメリットしかないようなショットというのはほとんどなく、矛盾した選択を迫られることが多いです。そんな場面に遭遇した時、「自分の得意なショットは何で、どのリスクを背負うのか」、明確な基準を設けておくことが上達の近道になります。そして「シュート力」が「ポジション力」を、「ポジション力」が「シュート力」を相乗的に上げてくれるということを心に留めておいてください。

